

## 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(5): —“Psychology: Briefer Course”におけるJamesの感情説の変化—

William James's theory of emotion as a pioneer work  
of affective neuroscience, part 5

— The James's theory of emotion in “Psychology: Briefer Course” —

佐藤俊彦\*

Toshihiko SATO

### 1. はじめに

William Jamesの感情学説に関して、これまでに4編の拙論(佐藤, 2021a, 2021b, 2022a, 2022b)を発表してきた。前回の第4報(佐藤, 2022b)においては、Jamesの感情学説の内容に関する、時間経過に伴った変遷を明らかにするために、彼の感情学説に関連した2つの文献、すなわち、1884年にMind誌にて発表され、“What is an emotion?”と題された論文(James, 1884)と、1890年に刊行された著書である“The Principles of Psychology”(James, 1890; 以後、The Principlesと略記する)の中でも、特に“Emotions”と題された章の内容などを中心として比較を行い、この学説が発表されて以後の最初の6年ほどの間の変遷として、以下の4つの点を指摘した。すなわち、1) 1884年のMind誌の論文の中でもすでに、ともに生起する身体反応がどれだけ顕著であるかに応じて感情の分類を行っていた一方で、1890年のThe Principlesでは、これらの2種類の感情に対して、それぞれ、粗大感情(coarser emotions)ならびに繊細感情(subtler emotions)と命名したこと、2) 前者の粗大感情が生起するメカニズムに関しては、2つの文献で共通のメカニズムを提案していた一方で、後者の繊細感情が生起するメカニズムに関しては、1890年のThe Principlesにおいて新たに、一次的知覚(primary feeling)と二次的感情(secondary emotions)の2段階のプロセスを想定し、二次的感情の生起プロセスにおいて、身体反応の知覚が影響を及ぼすことを主張したこと、3) 1890年のThe Principles

では、Lange(1885)の学説を全体的には高く評価し、自らの学説の説明の中にLangeの記述を多く取り入れていた一方で、Jamesの同じ文献の中では、Langeの学説において、感情生起のプロセスの中で特に重視されていた、血圧や心拍といった循環器系からの影響に関して、Jamesが、あまり重要視していないことが述べられており、この点に関して、Langeの学説に対する批判的な記述も見いだされること、および、4) 1890年のThe Principlesでは、本能や意志といった、感情以外の心理的機能と、感情との関連を説明しており、感情のみにとどまらない、より広範な心理学的理論の構築を目指していたと考えられるという4つの点を指摘していた。

今回の第5報では、1890年のThe Principlesの感情の章(第25章)の内容(James, 1890)と、その2年後にThe Principlesの縮約版として出版された“Psychology: Briefer course”(以後、Briefer courseと略記)の感情の章(第24章)の内容(James, 1892)を比較する作業を通して、この2年間において、Jamesの感情学説に修正ないし追加された部分があったかどうかを検証するとともに、縮約版の作成において、Jamesが彼の学説のどの要素を著書の中に記述を残し、どの要素を割愛したかを確認することによって、彼自身が感情学説の記述のどの部分を重視していたかを考察してみたい。これにより、The Principlesの感情の章で取り上げられた主要な議論の内容に関して、Jamesが考えていた主要な要素間の優先順位、もしくは重要性のランクづけを見出せるのではないかと考えている。

この作業を始めるのに先立ち、James自身の記述に基づきながら、Briefer courseが出版された経緯について確認しておきたい。つまり、Briefer courseの感情の章の内容について議論する前に、Briefer courseに関するJamesの編集方針について確認しておきたい。Briefer courseの序文には、James自身による編集方針が記載されている。この編集方針は、感情の章だけに限定されたものではなく、Briefer course全体の編集方針では

あるものの、同書全体が、どのような方針に従って、The Principlesの内容に対して修正が加えられたのかを理解しておくことは、感情の章の構成の変更について考察する上で非常に重要であるだろう。Briefer courseが出版されたときの編集方針などの経緯を明らかにした上で、The Principlesとの間で内容の異同を確認し、Briefer courseの中で行われた感情学説の修正内容や、削除もしくは追加された要素の具体的な内容につ

Table 1 "Psychology: Briefer course" (James, 1892)の序文(Preface)における主な内容とそのページ番号

主な内容	該当するページ番号
<p>★(第一段落)縮約版作成における修正内容(一部の章の削除や書き直しなど)</p> <p>A) 縮約版作成の主たる目的は、教室での授業で使いやすいものを作ることであった。</p> <p>B) 一部の章については全体を削除し、一部の章の内容を書き換えた。</p> <p>C) 個々の感覚に関する短い章をいくつか追加した。</p> <p>D) 快と苦痛などに関連する章を設けられなかった。</p>	<p>p. iii</p>
<p>★(第二段落)The Principles of Psychologyの構成について(章の順番に関する批判が多いことに対する反論)</p> <p>E) この序文において、The Principles of Psychologyの構成について述べておきたい。</p> <p>F) The Principles of Psychologyに対しては、章の順序に関して、無計画であるとか、不自然であるといった批判が多かった。</p> <p>G) 大部分が総説論文の寄せ集めであって、全体としてのまとまりに欠け、体系的ではないといった指摘もあった。</p> <p>H) これらの否定的意見には、事実の誤認がある。</p> <p>I) こうした構成の順序は、見栄えは良くないし、あまり見かけないかもしれないけれども、決して無計画に行っただけではなく、教育的な配慮に基づいて構成を考えた。</p> <p>J) この中では、最初に、経験上よく知られている心の側面の具体的な内容を取り上げ、これに続いて、心的要素として、抽象的に考えることで理解すべき内容を扱うこととした。</p> <p>K) 心の「構成単位」から心を組み立てていくような順序で章を構成することで、説明をわかりやすくできるとともに、詳細に区分した目次の一覧を示すことができる一方で、そのような枠組みでは、現実をうまくとらえきれないという短所もある。</p> <p>L) 意識状態の全体像に対して可能なかぎり着目していくことによって、心の実際の姿をよりの確に理解させることを試みた。</p>	<p>pp. iii-iv</p>
<p>★(第三段落)The Principles of Psychologyの構成について(雑誌に掲載された論文を寄せ集めたものであるとの批判に対する反論など)</p> <p>M) (雑誌論文の寄せ集めであると批判する人々について) The Principlesと、雑誌に掲載された論文との関係性を誤って理解している。</p> <p>N) 一つの例外を除いて、それ以外のすべての章を、The Principlesのために執筆したのであり、The Principlesの完成がずいぶん先に思われたので、一部の章の原稿を雑誌に投稿したにすぎない。</p> <p>O) The Principlesの構成を考えるための努力を惜しんだなどと、非難される理由はないと考える。</p>	<p>p. v</p>

いて議論することとしたい。

## 2. Briefer courseの序文にみられるJamesの編集方針: JamesはBriefer courseの何を削り、何を加えようとしたのか?

ここでは最初に、Briefer courseの序文の構成について考えてみたい。この序文の内容は、おおよそTable 1のような構成になっている。Jamesは、Briefer courseの序文の第一段落の中で、次のように述べている。“In preparing the following abridgment of my larger work, the ‘Principles of Psychology,’ my chief aim has been to make it more directly available for class-room use. For this purpose I have omitted several whole chapters and rewritten others. I have left out all the polemical and historical matter, all the metaphysical discussions and purely speculative passages, most of the quotations, all the book-references, and (I trust) all the impertinences, of the larger work, leaving to the teacher the choice of orally restoring as much of this material as may seem to him good, along with his own remarks on the topics successively studied.”(James, 1892, Preface, p. iii; 筆者訳: 拙著「心理学原論」は比較的分量が多く、これの縮約版を作るにあたっての私の主たる目的は、授業の教室で利用しやすいものにするという点にあった。この目的に応じて、章全体を削除した章が複数あったし、書き直した章もあった。先行して出版した長編の著作[すなわちThe Principles of Psychology](訳文中、角括弧の内容は筆者による補足。以下同様)の中でも、学術的な論争や歴史的な経緯に関する問題、高度に抽象的な議論や、もっぱら推論のみに基づく記述のすべてと、引用した記述の大半と参考文献の記述すべて、ならびに、私自身から見ても、書き方にやや行き過ぎた部分があったように思われる議論すべてを削除することで、[授業を担当する]教師の判断で適宜、[短縮版で削除されたThe Principlesの]内容を口頭で補ったり、研究に進展がみられた話題について教師自身の所見を述べるような選択の余地を残しておくこととした。)

この記述に従えば、このBriefer courseは、一般に知られているように、The Principles of Psychologyの縮約版として編集されたことは間違いないようである。ただし、その縮約の作業において、各章の記述を削るだけでなく、書き直した部分があるという点には、特に留意すべきではないかと筆者は考えている。その書き直しの

中に、Jamesの考え方の変化が反映されていた可能性があるためである。

これに続いて、感覚の章を追加したことや、現在論争中の問題を取り上げなかったことなどを述べた後、次のように述べている。“About two fifths of the volume is either new or rewritten, the rest is ‘scissors and paste.’” (James, 1892, Preface, p. iii; 筆者訳: 本書のおおよそ5分の2は、新たに加筆したか、または書き直しており、残りの部分は、すでにあった文章を切り貼りしてきた文章である。)ここに述べられている内容からは、新たに加筆された文章と修正された文章が、全体の4割程度であったことを確認できる。かなりの改変があったかもしれない、単なる縮約版ということでもなかったのかもしれない。

実は、これに続く文章には、Jamesの感情学説を考える上で、重要な文が続いている。“I regret to have been unable to supply chapters on pleasure and pain, aesthetics, and the moral sense. Possibly the defect may be made up in a later edition, if such a thing should ever be demanded.”(James, 1892, Preface, p. iii; 筆者訳: 快と苦痛、美的感覚、および道德感に関する章を設けることができなかつたことは残念である。もし新たな版を出すことが求められたら、この不足分を埋め合わせることもできるかもしれない。)快や苦痛はおそらく、粗大感情と深くかかわるところであろうし、美的感覚や道德感は、繊細感情に深く関わるものでもあるだろう。この点に関して、具体的なことは記述されていないものの、Jamesは、粗大感情ならびに繊細感情の双方についての学説を、さらに発展させようという構想を持っていたのかもしれない。

以上のようなJamesの編集方針も念頭に置きながら、以下では、感情の章の内容に関して、どのような加筆や修正が行われていたかを確認していきたい。章を構成する内容を比較するため、The Principlesの感情の章の構成をTable 2に、Briefer courseの感情の章の構成をTable 3に示す。

## 3. The PrinciplesとBriefer courseの感情の章の間の内容比較

### 3.1 本能(instincts)と感情(emotions)との関連

The Principlesの感情の章(第25章)と同様に、Briefer courseの感情の章(第24章)でも、本能と感情との関連についての議論から始まる。ただし、Briefer courseの第24章の冒頭に関して、The Principlesの第25

章の冒頭と比較したときに大きく異なる点として、前章が本能の章ではなく、意識と運動(Consciousness and Movement)であったため、Briefer courseの感情の章の導入部分は、直前の意識と運動に関する章との連続性を認めることができないことも指摘しておきたい。

本能と感情との関連についての議論の中には2つの段落があり、第1段落は新規に加筆されたものと思われる。その中には、次のような文が含まれており、本能と感情の相違点を簡潔に説明している。“An emotion is a tendency to feel, and an instinct is a tendency to act, characteristically, when in presence of a

certain object in the environment.”(James, 1892, p. 373; 筆者訳:それぞれの特徴として指摘できるのは、感情は感じとることの傾向であり、本能は行動として表すことの傾向であるということであって、いずれも環境に何らかの対象が存在しているときに生じる傾向である。)これに対して、第2段落の内容は、The Principlesに含まれていた内容が、具体例などを削除した上で、おおよそ、そのまま利用されているようである。

ここで、導入部分となる第1段落を新たに加筆している点について考えてみたい。例えば、Briefer courseの当該部分の第2段落には、The Principlesにもほぼ

Table 2 James (1890)における主要な議論の内容と該当部分のページ番号(佐藤(2022b))の内容を一部修正)

主な内容	該当するページ番号
◎(1) 本能 (instinct) と感情 (emotions) との関連(前章における本能に関する議論を受けて)	pp. 442-443
◎(2) 感情の身体反応に関する具体的な説明(Lange(1885)による悲嘆、Darwin(1872)による恐怖、および、Mantegazza(1885)による憎悪に関する記述)	pp. 443-449
◎(3) 感情の身体反応における個人差や多様性に関する議論、ならびに感情が生起する一般的なメカニズムを明らかにすることの重要性に関する指摘	p. 449
(4) 感情体験の成立過程に関する議論(粗大感情に限定)	
(A) 感情体験の成立過程に関する仮説 (感情体験に対する身体反応の先行性と因果性)	pp. 449-450
(B) 身体反応のさまざまな種類と感情体験に応じたパターン	p. 450
(C) さまざまな身体反応を素早く知覚できる	pp. 450-451
(D) 身体変化の知覚なしに感情体験は生じない(身体変化の知覚が必須条件)	pp. 451-453
◎(E) この学説は唯物論的一元論ではない	p. 453
◎(F) 感情をめぐる2種類の問題:感情表出の分類の問題と感情が生起するメカニズムの問題	pp. 453-454
◎(5) James学説を実験的に検証することの困難さ	pp. 454-456
(6) James学説への反論に対する議論	
○(A) 第1の反論とそれに対する回答	pp. 456-462
○(B) 第2の反論とそれに対する回答	pp. 462-466
○(C) 第3の反論とそれに対する回答	pp. 466-467
○(7) 繊細感情について	pp. 468-472
(8) 感情の中樞は脳に存在しない	pp. 472-474
◎(9) 感情の個人差(感情的性質と想像力の個人差)	pp. 474-477
◎(10) さまざまな感情が生じる背景について	pp. 477-484
◎(11) 結語(感情の分類について)	p. 485

◎:James(1890)で新規に追加された部分; ○:James(1884)の内容の一部が追加された部分;

無印:James(1884)とほぼ内容が一致する部分

同様の内容で記されていた次の文章がある。“Every object that excites an instinct excites an emotion as well. The only distinction one may draw is that the reaction called emotional terminates in the subject's own body, whilst the reaction called instinctive is apt to go farther and enter into practical relations with the exciting object.” (James, 1892, p. 373; 筆者訳：本能を刺激するものはすべて、感情も引き起こす。区別する方法があるとするれば、感情的であるとされた反応は、その当事者自身の身体の中に終始するものであり、その一方で、本能的とされた反応はさらに作用の範囲が広く、刺激となる対象物に対して、実際に何らかの行動が生じる傾向がある。)この文の内容は、先に引用した“An emotion is a tendency to feel ……”の文との間で、かなりの程度、共通の意味を有しているようにも思われるし、なおかつ、前者の文のほうが平易で、直感に訴えて、わかりやすい表現であるようにも思われる。筆者の憶測にすぎないものの、Jamesは、感情と本能との関連について、Briefer courseの主たる読者として想定された大学生に

向けて、平易でわかりやすい導入の段落として、この第1段落を新規に設けた可能性があるのではないだろうか。

### 3.2 感情にはさまざまな種類がある

この節は、一つの段落のみで構成されており、段落の前半では、後ほど詳しく述べるように、文章構成の改変や文章の追加があった一方で、後半では、若干の加筆はあるものの、The Principlesの当該部分(Table 2の2)の文章が、ほぼそのまま用いられているようだ。また、The Principlesの感情の章にあった文章が多く認められる一方で、Briefer courseで削除された部分も多くあり、例えば、The Principlesの感情の章の当該部分では、LangeやDarwin、Mantegazzaによる感情の身体反応および身体表出についての詳細な描写が引用されていた一方で、Briefer courseの当該部分には、この種の記述は一切含まれていない<sup>1)</sup>。

Briefer courseのこの節において、Jamesは、最初に、粗大感情と繊細感情の違いを説明し、感情にはさまざま

Table 3 James (1892)における主要な議論の内容と該当部分のページ番号

主な内容	該当するページ番号
○(1) 本能 (instincts) と感情 (emotions) との関連 [1]	pp. 373-374
○(2) 感情にはさまざまな種類がある [2]	pp. 374-375
(3) 感情が多様である原因について [3]	p. 375
(4) 粗大感情においては、感情体験が身体表出によって生じる	
○(A) 感情体験に対する身体反応の先行性と因果性について [4A/6A]	pp. 375-378
○(B) さまざまな身体反応を素早く知覚できる [4B/4C]	pp. 378-379
(C) 身体変化の知覚なしに感情体験は生じない (身体変化の知覚が必須条件) [4D]	pp. 379-380
(D) この学説は唯物論的一元論ではない [4E]	pp. 380-381
(E) 感情の多様性 [4F]	pp. 381-382
○(F) 仮説から導かれる結果の予想とその検証 [6B]	pp. 382-383
◎(G) 批判的意見に対する回答 [6C]	pp. 383-384
◎(5) 繊細感情について [7]	pp. 384-385
(6) 恐怖に関する記述 (Darwinからの引用) [2の一部]	pp. 385-386
○(7) 感情反応の生成メカニズム [10]	pp. 386-390

◎: James (1892) で大幅に変更された部分;

○: James (1890) の内容の一部が追加されたり構成が変更された部分;

無印: James (1890) とほぼ内容が一致する部分

角括弧内の英数字は、Table 2に示したThe Principlesの感情の章の項目との対応関係を示す。

なお、The Principlesの5, 8, 9, および11の項目 (Table 2参照) はBriefer courseには掲載されていない。

まな種類があることを述べている。これらの感情の違いについて説明する文章は、*The Principles*の中では、さまざまな感情反応に関して説明する部分の最後であった(p. 449)ことを考えると、Jamesにとって、感情の種類について説明するにあたり、最初に粗大感情と繊細感情を説明することが有効であると考えられたのだろう。

また、この節の前半では、“Dictionaries of synonyms have discriminated them, as well as text-books of psychology—in fact, many German psychological text-books are nothing but dictionaries of synonyms when it comes to the chapter on Emotion.” (James, 1892, p. 374; 筆者訳：類語辞典には、これらの[感情を表す]言葉の違いが述べられており、心理学の教科書も同様のことを書いている。実際、ドイツの心理学の教科書の多くを見てみると、感情の章には、類語辞典と同じようなことしか書かれていない)のように、ドイツにおける感情心理学研究への不満を表すような文も追加されている。この類語辞典の記述より後は、*The Principles*の文章がほぼそのまま用いられているようだ。

この節において、感情現象の観察のみにとどまる研究アプローチに対しては、Jamesは、Briefer courseにおいても批判的な態度を示しており、“They give one nowhere a central point of view, or a deductive or generative principle.” (James, 1892, p. 375; 筆者訳：[感情をテーマとした過去の文献においては、]中核的な問題、すなわち、演繹的な推論から導かれる[普遍的な]法則性、もしくは感情の生起メカニズムに関する法則性に関して、まったく言及されていない)という一文からも明らかなように、*The Principles*における議論と同様に、現象観察にとどまらず、感情の一般的性質や感情生起のメカニズムに着目した研究の重要性を提唱しているものと考えられる。

### 3. 3 感情が多様である原因について

この節の冒頭は、*The Principles*でも述べられていた次の文章から始まっている。“The trouble with the emotions in psychology is that they are regarded too much as absolutely individual things.” (James, 1892, p. 375; 筆者訳：心理学における感情研究が克服すべき問題点として、個人が[個別に]経験する[個人差の]現象のみに関心を向けすぎている。)前節において展開された議論、すなわち、現象観察にとどまらず、感情の一般的性質や感情生起のメカニズムに着目した研

究の重要性を主張する議論が引き続き展開されている。

*The Principles*の文章との相違点として、節の途中では、Langeの学説を引用する文章などが大幅に削除されている一方で、“Having the goose which lays the golden eggs, the description of each egg already laid is a minor matter.” (James, 1892, p. 375; 筆者訳：もし金の卵を産むガチョウがいるなら、すでに産み落とされた金の卵の特徴を細かく記述しても、ほとんど意味がない)という*The Principles*の「金の卵を産むガチョウ」の文はそのまま記載されているし、最初の議論の内容を、粗大感情のみに限定すると述べている点なども、*The Principles*の当該部分と同様である。つまり、この節についても、具体例の引用などは削除されているものの、議論の内容は大きく変わっていないと結論できる。

## 3. 4 粗大感情においては、感情体験が身体表出によって生じる

### 3. 4. 1 感情体験に対する身体反応の先行性と因果性について

この部分では、*Mind*誌の論文 (James, 1884) と *The Principles* のいずれにおいても提示されていた、James の感情学説の中でも、もっとも中核的な要素についての説明が行われている。ここでは、粗大感情の生成メカニズムに関して、上記の2つの文献でも記載されていた、“My theory, on the contrary, is that *the bodily changes follow directly the perception of the exciting fact, and that our feeling of the same changes as they occur is the emotion.*” (James, 1892, p. 375; イタリアック体表記は原文に従っている。以後の引用も同様；筆者訳：私の説では、[感情が生じた後に身体的表出が生じるとする伝統的な考え方とは]反対に、身体的な変化は、感情の対象となるものを知覚した直後に生じるのであって、そのときに生じている変化を感じるものが感情である)の一文がほぼ、そのまま記述されている。この点では、Jamesのこれまでの考え方が踏襲されるとみなして良いだろう。

この記述から2つほど先の段落は、“To begin with, *particular perceptions certainly do produce wide-spread bodily effects by a sort of immediate physical influence, antecedent to the arousal of an emotion or emotional idea.*” (James, 1892, p. 376; 筆者訳：最初に述べておきたいのは、ある種の知覚によって、広範な身体的変化が生じることは確かであり、これは、感情そのもの、

もしくは感情に関連した観念が生起することよりも先に、身体の側に直接的な影響が及ぶことによるのである」という文で始まっている。この文と、それに続く内容とは、新規に加筆されたものではなく、*The Principles*の感情の章において、Jamesの感情学説に対する第一の批判への反論(Table 2の6A)として記述されていた内容である。*The Principles*では、3つの批判に対する反論をそれぞれ独立したセクションとしていた一方で、*Briefer course*では、彼の感情学説の説明の中に、その反論に関連した議論の一部を取り入れたものと思われる。ここで第一の批判への反論の中の文章を利用したのは、身体反応の先行性と因果性を説明する上で有用であるとJamesが考えたためであろう。

この第一の批判への反論からの引用は、さらに続き、*The Principles*では途中で挿入されていたLangeのモノグラフ(1885)からの引用などは省略されているものの、それに続く、感情が身体反応によって生じることを証明するための最善の方法についての文章が、そのまま記載されている。この中では、対象なしに感情が生起する病理的な症例について取り上げており、ある症例では、深い呼吸ができなくなり、心臓の拍動が速くなるなどの上腹部の身体変化や、姿勢の変化など、一連の変化を知覚することによって、病的な不安の感情を体験するとのことである。

上述のように、*Briefer course*の当該部分では、感情体験の先行性と因果性に関して、*The Principles*における第一の批判への反論を含めながら議論を進めており、*The Principles*におけるJamesの主張する内容とほぼ同じ内容を述べていると考えてよいだろう。この節の末尾では、“The emotion here is nothing but the feeling of a bodily state, and it has a purely bodily cause.”(James, 1892, p. 378; 筆者訳:ここで生じた感情は、身体状態の知覚そのものであって、これが生起する原因は、身体活動にほかならない)という、*The Principles*でも述べられていた一文が記載されており、この内容こそが、粗大感情の生成メカニズムとしてJamesが主張したいものであったのだろう。

### 3.4.2 さまざまな身体反応を素早く知覚できる

この部分の前半では、*The Principles*における「身体反応のさまざまな種類と感情体験に応じたパターン」(Table 2の4B)と「さまざまな身体反応を素早く知覚できること」(Table 2の4C)について説明した部分の文章の多くが使われている。文章の構成としては、先

に、知覚の素早さ(4C)の文章が使われており、それに続いて、身体反応のさまざまなパターン(4B)についての文章が記されている。

ただし、この説明の中で、*The Principles*の記述内容のどの部分が取捨選択されたかという点に関して、筆者には一点、気になる点がある。*The Principles*における、さまざまな身体反応に関する説明の部分(4B)で記述されていた、“a sounding-board”(反響板; (James, 1890, Vol. 2, p. 450)に見立てた比喩を含む文章がすべて削除されている点についてである。なぜなら、この“a sounding-board”の表現は、*Mind*誌の論文(James, 1884)にも記載されており、*The Principles*において粗大感情が生起するメカニズムを説明する上で、重要なキーワードであったように思われたからである。これは筆者の憶測にすぎないものの、上述の“a sounding-board”にたとえた説明は、*Briefer course*の読者として想定される大学生にとっては、やや難解ではないかとJamesが考えたために削除されたのかもしれない。

### 3.4.3 身体変化の知覚なしに感情体験は生じない

この部分の冒頭には、*The Principles*だけでなく、*Mind*誌の論文でも用いられていた文章が記されている。この文章の中に、Jamesが主張したい中核的な部分が含まれていると思われる。その文章とは次のようなものである。“I now proceed to urge the vital point of my whole theory, which is this: *If we fancy some strong emotion, and then try to abstract from our consciousness of it all the feelings of its bodily symptoms, we find we have nothing left behind, no 'mind-stuff' out of which the emotion can be constituted, and that a cold and neutral state of intellectual perception is all that remains.*” (James, 1892, p. 379; 筆者訳:ここで筆者の理論全体に関わる重要な点についての議論に進みたい。その重要な点とは、次のようなことである。強い感情が生じたときのことを思い浮かべて、その感情体験の意識から、身体的変化の知覚をすべて取り除こうとすれば、そこにはもはや感情体験を構成するような心の要素は存在せず、知覚に基づく冷静で中立的な意識状態だけがそこに残っていることに気づくだろう。)これに続く内容については、*The Principles*における当該部分(Table 2の4D)と比べて、若干の文章の内容の改変はあるものの、ほぼ同様の内容であるようだ。

### 3.4.4 この学説は唯物論的一元論ではない

この部分は、The Principlesの感情の章と比較した場合に、Table 2の4Eに相当する。The Principlesの当該部分とほぼ同じ内容であり、“Let not this view be called materialistic” (James, 1892, p. 380; 筆者訳：この考え方を物質主義的であるなどとは言わないでもらいたい)という見出しの一文が表すとおり、彼自身がここで主張している学説が、物質主義、ないし唯物論的な考え方ではないことを説明する内容となっている。

The PrinciplesとBriefer courseの当該部分の内容がほぼ同じであるということを確認した上で、この節の内容について、簡単にまとめて述べておきたい。物質主義ではないと主張することに関しては、彼の学説が、主観的な体験という心理的な機能に焦点を当てた学説であって、さまざまな身体器官の働きのみに着目しているのではないことを読者に理解してもらいたかったのだろうと思われる一方で、Jamesは、自らの感情学説における感情の生成メカニズムの中に、感覚のプロセスを含んでいるために、物質主義であるとの批判を受けかねない懸念していたようであり、この懸念は、以下の文章の中に端的に表されている。“and if any one still finds materialism in the thesis now defended, that must be because of the special processes invoked. They are sensational processes, processes due to inward currents set up by physical happenings.” (James, 1892, p. 380-381; 筆者訳：ここで主張している内容に、物質主義的な考え方が含まれていると思う人がいるとすれば、それはまさに、その中に特別なプロセスが関与しているために違いない。そのプロセスとは、すなわち、感覚のプロセスであって、これは、物理的な現象から生じた内面への刺激作用に基づくプロセスである) 実際、この感覚のプロセスに関連した批判があったのかもしれない。このような批判的な考え方に応答するかのように、Jamesは次のように述べている。“But our emotions must always be *inwardly* what they are, whatever be the physiological ground of their apparition.” (James, 1892, p. 381; 筆者訳：だが、感情が発現するための生理学的な基盤がどのようなものであるにせよ、われわれ人間の感情は、つねに精神の内にある存在であるに違いない。) このように述べることで、Jamesは、彼の学説において、感情は精神的な問題であることを前提としていることを確認し、彼の学説が物質主義ではないことを、あらためて明示している。

おそらく、彼の学説が物質主義ではないという主張

は、次に続く、感情の生成メカニズムの議論を進める上で、Jamesが身体機能だけに着目して感情を論じているかのように、読者に誤解を与えないための注意喚起の役割を果たしているように筆者には思われる。

### 3.4.5 感情の多様性

Jamesは、彼の考え方が物質主義に基づくものではないことを断った上で、その次の節において、身体反応から感情が生成されるメカニズムについて議論している。このBriefer courseの部分の内容は、The Principlesの中で、唯物論的な一元論ではないと主張していた節に続く部分の内容に相当する (Table 2の4F)。この節は、The Principlesにも記されていた、次の一文から始まっている (p. 462)。“If such a theory is true, then each emotion is the resultant of a sum of elements, and each element is caused by a physiological process of a sort already well known. The elements are all organic changes, and each of them is the reflex effect of the exciting object.” (James, 1892, p. 381; 筆者訳：この理論が正しいならば、個々の感情は、構成要素を合成した総和によって生じるものであって、個々の構成要素は、すでによく知られている生理学的な過程によって引き起こされる。これらの構成要素はすべて、身体的変化であって、個々の身体的変化は、刺激となった対象に対して生じた反射の作用に相当する。) 前節では、物質主義的な考え方ではないと前置きしておきながら、感情とは、生理学的な反応の総和であるとも読み取ることができそうな記述があることに違和感を覚えた読者もおられるかもしれない。おそらく、これに先立って述べられた、物質主義ではないという議論は、ここでの議論を読者に正確に理解してもらうために、「感情=身体反応の総和」ではないという注意喚起を行う必要があるとJamesが考えたことによるものだったのではないだろうか。つまり、この文章の内容を理解する上で注意すべき点は、Jamesが言いたいのはおそらく、「感情=身体反応の総和(そのもの)」と理解すべきではなく、「感情=身体反応の総和から作り出される何か(the resultant)」だということであるだろう。

そして、この節において、Jamesは、分類と記述の研究アプローチから、因果関係のメカニズムを解明しようとするアプローチへと議論を発展的に展開させようと試みている。“Now the moment an emotion is causally accounted for, as the arousal by an object of a lot of reflex acts which are forthwith felt, we immediately see

*why there is no limit to the number of possible different emotions which may exist, and why the emotions of different individuals may vary indefinitely, both as to their constitution and as to the objects which call them forth.*” (James, 1892, p. 381-382; 筆者訳: 今ここで、感情が生じる原因のメカニズムとして、多くの反射作用の対象を知覚することで生じた覚醒であると考えることにより、感情の種類が多様で、限りないほど多くの種類がある理由は何か、ならびに、感情が個人間でさまざまに異なったものとなりうる理由が何であるのかについて、感情を構成する内容と、感情を引き起こす対象という、2つの点から理解できるようになる。)この部分における原文の見出しとなっている“*This view explains the great variability of emotion.*” (James, 1892, p. 381; 筆者訳: このような考え方によって、感情の多様性を説明することができる)の中の「*The view(この考え方)*」とは、まさに、感情生成のメカニズムに着目したJamesの考え方のことを述べているのだらうと思われる。

### 3.4.6 仮説から導かれる結果の予想とその検証

Briefer courseにおける、この部分に含まれる内容は、*The Principles*では、他の研究者からの反論と、それに対する回答をまとめたセクションに記載されており、3つの反論の中の第2の反論と、それに対する回答に相当する内容であった(Table 2の6B)。ここで検証されるべき仮説について、Jamesは、次のように説明している。“*If our theory be true, a necessary corollary of it ought to be this: that any voluntary and cold-blooded arousal of the so-called manifestations of a special emotion should give us the emotion itself.*” (James, 1892, p. 382; 筆者訳: もしわれわれの理論が正しいならば、その結果として次のような結論が必然的に導かれるはずである。何らかの感情が表出されるときと同様の身体の興奮が自発的に、なおかつ、感情を伴わずに生じた際には、その結果として、その興奮に対応した感情が生じるはずである。)このJamesの主張に関しては、後年、Jamesの感情学説への批判として、Cannon (1927)が提示した“*Artificial induction of the visceral changes typical of strong emotions does not produce them*” (Cannon, 1927, p. 113; 筆者訳: 強い感情反応に典型的に認められる内臓変化を人為的に引き起こしても、感情そのものを生じさせることはない)という指摘<sup>2)</sup>とも対応しており、このJamesの感情学説が持つ意味を理解し、その是非を議論する上で、きわめて重要

な論点であることは疑いないだろう。

この部分における議論の中では、本節に含まれる一文である“*Refuse to express a passion, and it dies.*” (James, 1892, p. 382; 筆者訳: 感情を表すことをやめれば、感情は終息してしまう)に端的に表されているように、怒りや悲しみなどの感情を例に挙げながら、身体運動や姿勢を含む身体反応によって、主観的な感情体験が増幅される一方で、反応を抑えることで感情が終息に向かうことが述べられている。途中、Bainの“*The Emotions and the Will*”からの引用(p. 463)や、Burke, Archerの著作からの引用など、*The Principles*に含まれていた記述の一部が削除されているものの、主張している内容はおおよそ同じであるように思われる。

### 3.4.7 批判的意見に対する回答

この部分における議論については、*The Principles*において示されていたJames学説に対する3つの反対意見のうち、第3の反対意見に関する内容(Table 2の6C)を踏まえていると思われるものの、その文章の内容は大幅に改変されている。一見したところ、*The Principles*の内容とは別な内容かとも思われたものの、内容を詳細に読んでみたところ、感情を表出することで、結果的に、感情が速やかに終息するし、逆に、感情の表出を抑止することで、怒りの感情などが増幅されることを指摘した、James学説への批判的意見に対して論駁している点で、これらの内容は、ほぼ同一であり、“*During the expression the emotion is always felt.*” (James, 1892, p. 383; 筆者訳: 表出が続く間、感情はつねに体験されている)という記述も、両方の文章の中に共通して認められる。

取り上げられている批判的意見も同一で、これに対するJamesの意見の結論も同一でありながら、なぜ文章が大幅に変えられているのか。これは、筆者の憶測にすぎないものの、Jamesは、この批判的意見の正当性を否定するための主張を行う上で、より強力な材料を考え出したのではないかと思われる。*The Principles*における議論では、感情の反応を抑制したとしても、感情を喚起させた対象がそのまま心の中に残っているので、感情を生み出す神経の信号が、別な神経の経路へと向かい、感情を変容させたり、増強させたりするという考え方を述べている。例えば、この考え方は、次の一文に端的に表されている。“*But if tears or anger are simply suppressed, whilst the object of grief or rage remains unchanged before the mind, the*

current which would have invaded the normal channels turns into others, for it must find some outlet of escape. It may then work different and worse effects later on.” (James, 1890, Vol. 2, p. 466; 筆者訳：だが、涙、もしくは怒りが単純に抑制されただけであれば、悲しみや怒りの感情の対象は、心の中にそのまま変わらずに残り続けることとなる。このとき、神経の興奮は、いずれかの経路へと向かう必要があるために、通常の経路から別な経路へと方向を転換する。その結果として、感情の表れ方が、それ以後に、異なるものになったり、増強されたりすることになるかもしれない。)これに対して、Briefer courseの説明は、より明確である。“But where the facial part of the discharge is suppressed the thoracic and visceral may be all the more violent and persistent, as in suppressed laughter; or the original emotion may be changed, by the combination of the provoking object with the restraining pressure, into another emotion altogether, in which different and possibly profounder organic disturbance occurs” (James, 1892, p. 384; 筆者訳：だが、表情における表出が抑制された場合、笑いをこらえているときのように、胸部や腹部の器官の活動はすべて増強されたままで持続する。つまり、感情を引き起こした対象と、抑制しようとする作用とが混合され、本来生じていた感情が、まったく異なる別な感情に変容してしまう可能性がある。このようにして生じた別種の感情の中では、身体活動の反応が当初とは異なったものになることに加えて、こうした反応が、より広範囲で強い反応となる可能性がある。) Jamesは、The Principlesにおいては、反応表出の抑制時に、神経信号ないし神経の興奮 (the current) の向きが変わるといふ、非常に抽象的な説明をしていた一方で、Briefer courseにおいては、身体器官の反応が変容したり、増強されたりするという点で説明を試みており、Briefer courseの中で説明内容が大幅に変わっているのは、James自身が、後者の説明のほうが、より説得力が高いと考えたためではないだろうか。

この推測に関連して、この批判的意見への論駁を終えるにあたり、The PrinciplesとBriefer courseにおける当該部分の末尾に記載された文の表現方法に、わずかではあるが違いが認められる。The Principlesにおいては、“On the whole, I cannot see that this third objection carries any weight.” (James, 1890, Vol. 2, p. 467; 筆者訳：全体として、この第三の反論は取るに足りないと考え) という、Jamesの意見表明のかたちで結論を述

べている一方で、Briefer courseでは、“On the whole, therefore, this objection has no weight.” (James, 1892, p. 384; 筆者訳：それゆえに、全体として、この反論は取るに足りない) と、明らかに断定的な表現へと変わっていることに留意すべきではないだろうか。このような末尾の結論の文の表現方法の違いを比較した結果からも、Jamesは、Briefer courseの編集作業の中で、この反論への応答内容をアップグレードして、より説得力の高い主張を発案できたと考えたために、本節の内容を大幅に書き直したのではないかと筆者は推察する。

Briefer courseにおける粗大感情についての議論はここまでであり、これ以後は、繊細感情に関する議論へと移っている。その一方で、The Principlesでは、James学説への3つの反論に対する議論の直前に記載されていた「James学説を実験的に検証することの困難さ」(Table 2の5)に関する記述は、Briefer courseには記載されていない。

### 3.5 繊細感情

この節においても、記述内容が大幅に書き換えられている。繊細感情の定義は、そのままであるにしても、繊細感情に関連したメカニズムの記述内容については、The Principlesの内容と比べて、異なっている部分があり、この点に関しては、特に注目すべきだろう。

繊細感情については、「感情にはさまざまな種類がある」と題された節(本論文の3.2)において、“The subtler emotions are the moral, intellectual, and æsthetic feelings, and their bodily reaction is usually much less strong” (James, 1892, p. 374; 筆者訳：繊細感情とは、道徳的、知性的、美的感情であって、身体的な反応が、かなり小さなものであることが多い) という定義が示されている。

その一方で、この3.5節における、繊細感情についての説明内容には、先に述べたように、The Principlesの内容と異なる部分があり、繊細感情の定義や特徴はそのままであったにせよ、その生成のメカニズムについてのJamesの考え方が変わったと推察できる。以下では、この節での議論について、James自身の文章表現に基づいて、慎重に確認していくことにしたい。

Jamesは、Briefer courseの中で、繊細感情の種類別に説明を行っている。その中で、最初に取り上げているのが美的感情である。本節の第一段落の冒頭で、“In the æsthetic emotions the bodily reverberation and the feeling may both be faint.” (James, 1892, p. 384; 筆者

訳：美的感情において、身体反応と、その知覚とは、いずれも微かなものであるかもしれない)と述べている。ここまでは、The Principlesの記述内容との違いを、ほとんど感じさせない一方で、これに続く文章では、“A connoisseur is apt to judge a work of art dryly and intellectually, and with no bodily thrill.”(James, 1892, p. 384; 筆者訳：芸術作品の鑑定人は、芸術作品の価値を見定めようとするときに、無感情で、なおかつ、知性的な態度であって、身体的な反応は認められない傾向がある)とあり、芸術を鑑定する作業では、身体反応が生じず、繊細感情も生じない場合が多いことを指摘している。The Principlesの内容では、こうした芸術の鑑定についても、繊細感情に含めて議論されていたにもかかわらず、Briefer courseでは、こうした心理的な機能を、繊細感情の範疇から排除してしまっている。つまり、Jamesは、Briefer courseにおいて、繊細感情に含まれる心理的機能の範囲を、かなりの程度限局させようと試みていたとも考えられる。

次いで、“On the other hand, works of art may arouse intense emotion; and whenever they do so, the experience is completely covered by the terms of our theory.”(James, 1892, p. 384; 筆者訳：他方、芸術作品が強い感情を生じさせることもある。どのような場合であれ、こうした経験は、われわれの理論によって十分に説明できる)と述べて、芸術作品に向き合う場合の中でも、強い感情が生じた場合について言及するとともに、このようなときに生じた、芸術鑑賞に伴う繊細感情を、自らの感情学説によって、十分に説明できるという意見を表明している。つまり、こうした繊細感情に関しても、身体的変化を知覚することによって生起するということを主張しているのだろう。

これに続いて、Jamesの感情学説において、繊細感情がどのようなメカニズムで生起すると考えられているのかが具体的に説明される。“Our theory requires that *incoming currents* be the basis of emotion. But, whether secondary organic reverberations be or be not aroused by it, the perception of a work of art (music, decoration, etc.) is always in the first instance at any rate an affair of *incoming currents*.”(James, 1892, p. 384; 筆者訳：われわれの理論では、神経興奮の入力が感情の基礎であることを前提としている。だが、二次的な身体反応が生じるかどうかにかかわらず、最初の時点ではつねに、芸術作品(音楽や装飾芸術など)の知覚に関連して、神経興奮の入力が生じる。)拙論(2022b)においても

指摘したように、JamesはThe Principlesにおいて、繊細感情の生成プロセスとして、一次的な知覚生成の過程と、二次的な感情生成の過程に分けて議論していた<sup>3)</sup>。上述の文章を見るかぎり、身体反応の知覚ではなく、「神経興奮の入力」を前提としている点が気になるものの、その点を除いて、ここまでの記述を見れば、この一次的知覚と二次的感情の2過程モデルは、そのまま維持されているかのようにも読み取れる。

ところが、これに続く文章を見ると、Jamesの2過程モデルは、その内容に大きな変容が生じていることが明らかになる。“The work itself is an object of sensation; and, the perception of an object of sensation being a ‘coarse’ or vivid experience, what pleasure goes with it will partake of the ‘coarse’ or vivid form.”(James, 1892, p.384; 筆者訳：作品そのものが感覚の対象であり、感覚の対象を知覚することによって、「粗大」で鮮明な体験が生じるときには、その知覚体験に伴って生じた喜び[の感情]は、「粗大」かつ鮮明な内容をもつものとなる。)これはつまり、先の“*Our theory requires that*”以下の文章の内容と合わせて、繊細感情においては、身体反応の知覚ではなく、対象物に対する知覚体験の内容や、これに伴う神経興奮の入力が重要な役割を果たすという論旨の大幅な転換が行われており、これを踏まえて考えれば、身体反応とは無関係に、知覚の内容の鮮明さによって、喜びの感情も大きなものになるだろうと考えられる。

The Principlesにおける記述と比較すると、その違いは用語の使い方にも表れている。“These secondary emotions themselves are assuredly for the most part constituted of other incoming sensations aroused by the diffusive wave of reflex effects which the beautiful object sets up.”(James, 1890, p. 470; 筆者訳：これらの二次的な感情を構成している要素の大部分は、他のさまざまな感覚入力的作用であると考えて間違いないだろうし、これらの作用は、美しい対象物によって生じた、広範囲に拡散する、波のような反射の作用によって引き起こされている。)これに対して、Briefer courseでは、先に引用したThe Principlesの文中の“*incoming sensation*”が“*incoming currents*”(James, 1892, p. 384)という、あいまいな脳内活動を指し示す表現に置き換えられている。The Principlesで想定されていた拡散的な反射の作用も、Briefer courseではまったく言及されず、“what pleasure goes with it will partake of the ‘coarse’ or vivid form”(James, 1892, p. 384)、つ

まり、知覚が鮮明だと、喜びも強く鮮明なものとなるという、抽象的で、かなりあいまいな表現に置き換えられてしまった印象を受ける。

Jamesの繊細感情の議論のあいまいさを指摘した研究者に、Dunlapがいた。Dunlap(1922)は、JamesのThe Principlesの感情の章や、Langeの感情学説のモノグラフの英語訳を併載した書籍の前書きの中で、次のように述べている。“But there is a still more important reason, in that the Mind article gives a much more clear-cut presentation of the organic theory of the emotions than does the chapter from the *Principles*: and in the latter James concedes much more to the esthetic and spiritual emotions in the way of independence of somatic and visceral processes than he does in the former. Whatever may have caused James to soften his views on this point, his first formulation of the theory is in this respect the more important.”(pp. 5-6; 筆者訳：しかし、Mind誌に掲載された論文で述べられていた感情の身体論の内容が、The Principlesの該当する章よりも明瞭でわかりやすいものであったことについては、もっと重要な理由がある。前者[すなわち、Mind誌に掲載された論文]に述べていた内容に比べると、後者[すなわち、The Principles]において、審美的ないし宗教的な要素の強い感情が、身体活動、ないし、内臓活動とは独立であることを、Jamesはより明確に述べている。Jamesの考え方の中で、この部分の議論が比較的穏健なものに変わってしまった理由が何であるにせよ、最初に論文として発表されたときの彼の感情理論の内容は、その議論の明瞭さという点で、いっそう重要になっている。)

実は、筆者は、上述のようなDunlapの指摘について、一つの疑問を抱いていた。この疑問について具体的に述べておくと、このことに関連して、The Principlesにおける繊細感情の説明は、一次的な知覚と二次的な感情の2つの過程を想定しており、少なくとも二次的な感情の生成過程には、身体活動の知覚が関与しているようにも読み取れることを拙論(佐藤, 2022b)で指摘していた。その一方で、このBriefer courseにおける繊細感情の議論を読むかぎり、本節においてすでに指摘したように、Jamesは、身体活動、ないし、内臓活動とは独立であるように述べているし、議論の内容が比較的穏健、さらに言えば、とてもあいまいな表現になっており、DunlapがThe Principlesの内容に対する意見として述べた内容が、The Principlesの実際の記述内容

ではなく、Briefer courseの記述内容と、奇妙なほどに一致しているように思われる。そのように考えると、Dunlapが序文で指摘した内容を書くときに想定していたのは、実際には、The Principlesにおける繊細感情の記述ではなく、Briefer courseにおける記述のほうであったのではなかろうかと筆者は疑っている。

Briefer courseの本節の第二段落においては、微かな喜びの感情や道徳的な感情が、上述の美的感情と同様に、外部からの感覚の入力とは独立したメカニズムで成立することを述べるとともに、感情の影響を受けやすい人たちの個人差について、身体反応と関連づけて説明している。これに続いて、本節の最後の部分では、「ウィットに富んだ表現を聞いても、実際に笑わなければ、感情は生じない」などの例も挙げながら、二次的な感情の過程に移行せずに、一次的な知覚の過程のみにとどまる場合について具体的に説明しており、この部分については、The Principlesにもほぼ同じ内容の文章が記されていた。

なお、The Principlesでは、この部分に続いて記載されていた、「感情の中枢は脳に存在しない」(Table 2の8)および「感情の個人差(感情的性質と想像力の個人差)」(Table 2の9)の記述全体が、Briefer courseでは記載されていない。拙論(佐藤, 2021b)で指摘したように、Jamesの感情学説が最初に発表されたMind誌の論文(James, 1884)では、感情の中枢が脳に存在しないという点が主要な論点であったと考えられる一方で、この議論は、Briefer courseの編集作業の中で、すべて削除されてしまっており、Jamesの感情学説の力点が、感情生成の脳内メカニズムから、粗大感情、および繊細感情の生成メカニズムへと重点が移っていた可能性を指摘できるだろう。

### 3.6 恐怖に関する記述

この節では、感情表出の例として、Darwinの著作から、恐怖の感情反応の内容が引用されている。ここで引用されている内容は、The Principlesにおける感情の章の前半で引用されていた内容(Table 2の2)とまったく同じものである。

このDarwinの著作から引用された記述については、The Principlesでは、感情の章の前半で引用されており、このThe Principlesの当該部分では、Darwinだけでなく、LangeやMantegazzaの著作の中の記述も引用されていた。特に、Langeの著作からの引用については、The Principlesの感情の章における引用回数が5回

であり、The Principlesの同章における、James以外の研究者の引用回数の中では、もっとも多かった(佐藤, 2022a)。このことを踏まえれば、The Principlesを執筆した時点においては、JamesはLangeの学説を重視していたことは間違いないだろう。

他方、Briefer courseの感情の章全体において、Langeの引用がまったく行われていないことに、正直なところ、筆者は驚かざるをえない。確かに、Briefer courseの序文では、本論ですでに指摘したように、“For this purpose I have omitted several whole chapters and rewritten others. I have left out all the polemical and historical matter, all the metaphysical discussions and purely speculative passages, most of the quotations, all the book-references, and (I trust) all the impertinences, of the larger work, leaving to the teacher the choice of orally restoring as much of this material as may seem to him good, along with his own remarks on the topics successively studied.”(James, 1892, Preface, p. iii; 筆者訳：この目的に応じて、章全体を削除した章が複数あったし、書き直した章もあった。先行して出版した長編の著作[すなわちThe Principles of Psychology]の中でも、学術的な論争や歴史的な経緯に関する問題、高度に抽象的な議論や、もっぱら推論のみに基づく記述のすべてと、引用した記述の大半と参考文献の記述すべて、ならびに、私自身から見ても、書き方にやや行き過ぎた部分があったように思われる議論すべてを削除することで、[授業を担当する]教師の判断で適宜、[短縮版で削除されたThe Principlesの]内容を口頭で補ったり、研究の進展がみられた話題について教師自身の所見を述べるような選択の余地を残しておくことと)と述べられており、こうした編集方針に従って、Langeの著作の記述の引用がすべて削除されたとも考えることができる一方で、Darwinによる記述を引用していながらも、Langeの記述を引用しなかったという点から、Jamesが、何らかの優先順位を考えていた可能性を推察できるのではないだろうか。以下に述べる内容は、筆者の憶測にすぎないものの、Jamesが、Langeの記述をBriefer courseの感情の章で引用しなかった理由としては、Jamesは、Briefer courseを執筆ないし編集していた時点において、彼自身の粗大感情に関する説明に十分な自信を持っており、Langeの学説を引用する必要がないと考えたことと合わせて、JamesとLangeの考え方の間に大きな相違があったことも関係していたのかもしれない。後者の理由について、具体的に言えば、

粗大感情の生成メカニズムに関して、Jamesは、骨格筋などの反応を重視していたのに対して、Langeの考え方は循環器系の反応を重視しており、Langeの記述を引用することは、Jamesが考えていた粗大感情の生成メカニズムを議論する上で、必ずしも有用ではないと判断した可能性があるのではないだろうか。

### 3. 7 感情反応の生成メカニズム

この節の冒頭の段落では、“How come the various objects which excite emotion to produce such special and different bodily effects?”(James, 1892, p. 386; 筆者訳：さまざまな対象によって感情が生起する際に、なぜそのようにさまざまな種類の特異的な身体変化を引き起こすのか?)という問題提起がなされている。

この問題提起は、おそらく、The Principlesの中で、Briefer courseの本節の内容に対応する部分(Table 2の10)において提起された二つの問題のうちの一つに対応していると思われる。The Principlesの当該部分で提起されている二つの問題とは、次の通りである。

- (1) What special diffusive effects do the various special objective and subjective experiences excite? (James, 1890, p. 477; 筆者訳：客観的および主観的な体験の双方を含め、さまざまな特異的な体験によって引き起こされるのは、どのような特異的で拡散性の効果なのか)
- (2) How come they to excite them? (James, 1890, p. 477; 筆者訳：こうした客観的ないし主観的な体験によって、なぜ拡散的な効果が生じるのか)

The Principlesにおける上記の二つの問題では、一方の問題が、客観的もしくは主観的な体験によって、どのような変化が生み出されるのかという、感情反応の内容に関する問いであり、もう一方が、どのようなメカニズムによって、そのような体験から反応が生み出されるかという、感情反応の生成メカニズムに関する問いであった。これらの二つの問題のうち、Briefer courseの本節の冒頭における問題提起は、特に、The Principlesの当該部分で提起された第二の問題、すなわち生成メカニズムの問題に深く関連していると思われる。ただし、Briefer courseでの問いの中では、体験(experiences)ではなく、対象(objects)が文の主語、ないし影響を及ぼす主体であるとされており、そこで引き起こされる変化の内容が、特異的で拡散性の効果(special diffusive effects)ではなく、さまざまな種類の特異的な身体変化(special and different bodily effects)になっていること

にも留意しておく必要があるかもしれない。

Briefer courseの当該部分の第二段落以後の内容のほとんどは、The Principlesの段落そのまま、もしくは段落の一部を抜粋した内容で構成されている。つまり、The principlesとBriefer courseのこれらの部分の記述を比較すると、そこで主張されている内容には大きな変更はないと結論して良いだろう。

本節の第二段落は、ある種の反応が特定の感情において表出される理由に関する説明であって、次の二つの文の中で簡潔にまとめられている。”Some movements of expression can be accounted for as *weakened repetitions of movements which formerly (when they were stronger) were of utility to the subject.* Others are similarly weakened repetitions of movements which under other conditions were *physiologically necessary concomitants of the useful movements.*” (James, 1892, p. 386-387; 筆者訳: [感情の] 表出に伴う運動反応の中には、かつて(比較的高い強度で表出されたときに)有用であった運動反応について、比較的低い強度で繰り返される現象として説明可能なものがある。それとは別な条件の下で、生理学的な事情により、有用だった運動反応に必ず付随して生じた運動反応が、同様に減弱されて繰り返される場合もある。)つまり、かつて、何らかの理由で役立つ反応が、強度を減弱したかたちで表れるか、あるいは、それ自体はさほど有用ではなかったにしても、何らかの別な有用であった反応に付随して生じていた反応が、減弱したかたちで表れるという考えが述べられており、これに関連したBriefer courseの記述を見ると、The Principlesの段落がそのまま利用されている。後者の理由により生じた反応の例として、Jamesは、The principlesとBriefer courseの中で、怒りや恐れに感情に伴う呼吸の変化を挙げている。

これに続く第三段落では、第二段落で記述されたJamesの考えに関連した、Spencerの著作における記述が引用されている。Briefer courseにおける、このSpencerからの引用の記述については、The Principlesの中で引用されていたSpencerの記述の内容とまったく同じである。

第四段落についても、“The principle of *revival, in weakened form, of reaction useful in more violent dealings with the object inspiring the emotion*” (James, 1892, p. 388; 筆者訳: 情動喚起対象への対処時に有用だった反応が減弱して再現される法則)を取り上げ

ている。若干の変更はあるものの、The Principlesの一つの段落の記述が、Briefer courseの中で、ほぼそのまま使われており、上述の「有用反応減弱法の法則」について、Darwin、Spencer、Wundtらの著作において記載されている例を引用しながら、具体的に説明している。

これに続く第五段落では、上記の法則に関連したDarwinの記述を引用しており、ここでの記述は、The Principlesの感情の章において引用された記述と同様の内容になっている。この記述の中では、眉をひそめる反応と、悲嘆や不愉快な感情との関連が指摘されている。

The Principlesにおいて、このDarwinの記述の引用の後に記載されていた段落が、Briefer courseでは完全に削除されており、The Principlesにおいて、この削除された段落が続いていた、次の段落が、Briefer courseにおける本節の第六段落となっている。この段落ではもう一つ別な感情表出の法則性、すなわち、“the principle of *reacting similarly to analogous-feeling stimuli*” (James, 1892, p. 388; 筆者訳: 類似した感情喚起刺激に対する類似反応の法則)について、具体例を挙げながら説明している。例えば、嫌悪や満足感については、次のように述べられている。“Certainly the emotions of disgust and satisfaction do express themselves in this mimetic way.” (James, 1892, p. 389; 筆者訳: 嫌悪や満足といった感情が表出されるときには、その感情の内容に応じて、外見上、類似した表出の特徴を示す。)具体的には、嫌悪に関連した感情表出では、嘔吐や吐き気に関連して、口唇や鼻をゆがめる反応が見られるし、満足に関連した表出では、口の中に何か甘いものか、おいしいものでも入っているときに、何かを口で吸うような笑顔の表情や、何かを味わうような口の動きを伴うとのことである。

これに続く第七段落が、この感情の章の最後の段落となっている。段落の前半は、上述の二つの法則で説明できない感情反応についての議論であって、後半部分には、The Principlesの中の二つの別な段落から、身体の震えの反応に関する記述と、偶発的に生じた、有用性ないし適応性のない感情反応がありうるとの指摘に関する記述とが、そのまま使われている。

本節は、以上のような内容であり、Briefer courseにおける感情の章の最後の部分であった。The Principlesの感情の章の中の文章をほぼそのまま使って構成されていることから、この節においても、The Principlesで

主張されている内容をそのまま踏襲していたと考えられる。

### 3. 8 後章との接続

Briefer courseにおける感情の章(第24章)以後の章の構成は、本能(第25章)、意志(第26章)、ならびに心理学と哲学(終章)となっている。本論の3.1でも指摘したように、Briefer courseの第24章の冒頭では、本能と感情との関連についての記述があった一方で、Briefer courseにおける本能に関する章は、感情の章の直後に続く第25章であった。Briefer courseの感情の章の最後の部分では、感情反応の生成メカニズムについて議論がなされており、本能に直接的に関連する内容があったとは考えにくい。

他方で、感情の章に続く、本能の章の冒頭部分では、感情に関連した議論があったかどうかを確認すると、直接的な関連性を述べた議論はなかったようで、感情と本能との間の関連性を述べていたのは、感情の章の冒頭部分だけであったようだ。この章の冒頭の段落では、次のような本能の定義が示されている。“*Instinct is usually defined as the faculty of acting in such a way as to produce certain ends, without foresight of the ends, and without previous education in the performance.*” (James, 1892, p. 389; 筆者訳: 本能とは、特定の目標を定めて行動する能力と定義されることが多く、その目標に関する洞察もなければ、目標達成のために事前に経験を積んだわけでもない。)そして、これに続く第二段落では、ネコの行動を例に挙げながら、本能について具体的な説明を行っている。このように、感情の章に続く、本能に関する章の冒頭部分では、感情と本能との関連に関する議論が特にあるわけではなかった。その理由としては、感情の章の冒頭において、感情とはどのようなものであるかを説明する際に、感情と本能とがどのような点で異なるかということを具体的に説明していたために、本能の章の冒頭で、感情と本能の関連をあらためて議論する必要がなかったということなのかもしれない。

### 4. Jamesの2つの著作における感情学説の比較: Briefer courseにおいて感情学説はどう変わったのか?

本論では、William Jamesの感情学説に関連した文献のうち、The Principlesの感情の章(James, 1890)と、Briefer courseの感情の章(James, 1892)とを比較して、

1890年から1892年にかけてのJamesの感情に対する考え方の変化を明らかにしようと試みた。本論の第2節でも述べたように、基本的には、Briefer courseはその名の通り、The Principlesに基づいた縮約版であり、また、両者の出版年は2年しか変わらないので、実を言えば、筆者は、この比較の作業を始めた当初、これらの2つの著作の間で、Jamesの感情学説に大きな変化はないだろうと予想していた。しかしながら、実際に、The PrinciplesとBriefer courseの文章の内容を比較してみると、いくつか大きな違いを確認することができた。これらのJamesの2つの著作の間で、感情学説の内容を比較した結果に基づき、1890年から1892年にかけて、Jamesの感情学説にどのような変化があったかという点について、以下に、筆者の見解を述べておきたい。

#### 4. 1 繊細感情の生成過程

筆者にとって、もっとも大きな変更であると思われたのが、本論の3.5節で指摘した、繊細感情に関する記述内容の変化である。繊細感情が生起するメカニズムに関して、一次的な知覚と二次的な感情という2過程のモデルの基本的な枠組みは、The Principlesと同様であるものの、二次的な感情の生成プロセスに顕著な違いがあることに着目する必要があるだろう。その違いとは、まず第一に、繊細感情の生成プロセスの基礎となるのが、身体反応の知覚ではなく、神経興奮の入力が重要な役割を果たすという論点の大幅な転換が行われており、第二には、第一の点の変更とも密接に関連していると思われるものの、身体反応とは無関係に、知覚の内容の鮮明さによって、喜びの感情も大きなものになると述べられている。これはつまり、粗大感情の生成プロセスにおいては、身体反応の知覚が重要な役割を果たすのに対して、繊細感情では、一次的知覚はもちろん、二次的感情に関しても、身体反応の知覚が必ずしも必要条件ではなく、知覚のプロセスに関連した神経興奮の入力によって、二次的な感情が成立する可能性があることを示唆している。

#### 4. 2 感情表出によって感情興奮は抑制されるか?

第二に、James学説への批判的意見に対して反論する内容が、ある程度改変されている。その意見とは、具体的に言えば、感情を表出することで、結果的に、感情が速やかに終息するし、逆に、感情の表出を抑制することで、怒りの感情などが増幅されるという指

摘である。この種の批判によって指摘された内容が仮に事実であるとするれば、Jamesの感情学説の根拠が揺らぎかねない重要な論点であるだけに、このような指摘を受けたJamesは、時間をかけて、より優れた反論の方法を考案しようとしていたのではないかと推察される。Jamesは、彼の感情学説の正当性を主張するために、1890年のThe Principlesにおいては、反応表出の抑制時に、神経信号、ないし神経の興奮(the current)の向きが変わるといふ、非常に抽象的な説明をしていた一方で、1892年のBriefer courseにおいては、本論の3.4.7の部分で述べたように、身体器官の反応が変容したり、増強されたりするという点で説明を試みており、後者の説明のほうが説得力が高いと考えたのではないだろうか。

なお、The Principlesにおいては、この内容を扱っていた部分には、「第三の反論」および、これに対する「回答」という見出しが付けられていた一方で、Briefer courseでは、該当する部分の名称が、単に「反論に対する回答」となっている。The Principlesの第一および第二の反論がどうなったのかと言えば、Briefer courseでは、第一の反論は、別な部分(本論の「3.4.1 感情体験に対する身体反応の先行性と因果性について」)の一部となっているし、第二の反論は、独立した部分(本論の「3.4.6 仮説から導かれる結果の予測とその検証」)になっている。

#### 4.3 「反響板」の用語が使われなくなった

第三に、細かいことではあるが、用語の使い方に変化が認められた。その用語とは、“sounding-board”(反響板)である。The Principlesの感情の章では、この用語が3回用いられていた一方で、Briefer courseの感情の章では、1回も使われていない。これが、どのような理由によるものであったかは、憶測の域を出ないものの、この反響板という表現は、Jamesの感情学説を説明するための用語として、不適切であるか、あるいは誤解を招きやすい表現であるとJamesが考えた可能性があるのではないだろうか。また、Briefer courseの主たる読者として想定されたのが、大学生であったという点も関係していたかもしれない。つまり、このような比喻表現によって、読者である大学生たちに誤解を与えかねないとJamesが懸念したのかもしれない。

#### 4.4 脳内機構に関する議論から感情生成のメカニズムへと主要な論点が移行した

The PrinciplesとBriefer courseの感情の章の構成を比較したとき、いくつかの構成要素がBriefer courseでは割愛されていることが明らかになった。ここで割愛されていたのは、具体的には、Table 2において、「James学説を実験的に検証することの困難さ」、「感情の中枢は脳に存在しない」、「感情の個人差」、ならびに「結語」というタイトルを付していた4つの構成要素である。上記の4つの構成要素のうち、「James学説を実験的に検証することの困難さ」を除外したのは、すでに述べたように、Jamesが、Briefer courseの序文において、現在論争中の問題を記載しない編集方針を提示していたことと関係があるかもしれない。The Principlesの結語で取り上げられた内容も、抽象的な問題で、感情の分類に関連した議論であった。大学生の教科書として作成していることを考慮すれば、感情の分類法に関する議論などで著書の紙面を多く使うよりは、研究成果の知見を取り上げたほうが良いと考えたのかもしれない。

他方、The Principlesで取り上げられていた「感情の中枢は脳に存在しない」と「感情の個人差」についての議論に関しては、Briefer courseから除外した理由が、明確には分からないものの、これらの項目に関して、もし分量の制限などによって削らざるを得ない事情があったのだとすると、これらの議論に関しては、この時期のJamesにとって、優先順位が比較的低いと考えられたのかもしれない。感情の個人差は、The Principlesで初めて取り上げられた話題であった一方で、感情の中枢が脳に存在しないという議論については、拙論(佐藤, 2021b)でも指摘したように、1884年にMind誌に発表されたJamesの論文の構成を見るかぎり、この論点はJamesにとって、きわめて重要なものであったと考えられる。かつて重要であった論点を除外して、Jamesがどのような議論に著書の紙面を多く使ったのかと言えば、Table 3に示すように、第一には、粗大感情が身体反応の知覚から生じるとする、粗大感情の生成メカニズムに関する議論であり、第二には、感情表出の反応がなぜ生じるのかという反応の生成過程についての議論であった。これらのことを総合して考えると、Mind誌の論文から始まり、The Principlesを経由して、Briefer courseに至る時間経過の中で、Jamesの感情学説の中で、当初はもっとも中心的な話題であった、脳の感情中枢が存在しないという議論から、粗大感情が

生起するメカニズムや、それに関連した規則性や法則性などへと、彼の関心の焦点が移行していった可能性があるのではないかと考える。

## 5. 結語

先にも述べたように、筆者は、この比較の作業を始めた当初、*The Principles*とBriefer courseに記載された感情学説の内容に、大きな違いはないのではないかと漠然と考えていた。実際に比較する作業の中で、上述のような繊細感情の生成メカニズムなど、部分的ではあるものの、際立った相違点を見出すことができた。Mind誌の論文と、*The Principles*の感情の章の内容との間の比較でも、繊細感情の議論に大きな変更があり、Jamesの繊細感情に関する考え方には、時間経過に伴って、ある程度の変化を見出すことができ、繊細感情をどう扱っていくかについて、James自身も苦慮する部分があって、数年の間に考え方が変わっていったのかもしれない。他方、粗大感情のメカニズムについては、Mind誌の論文以後、Briefer courseまでの間に、批判的意見に対する反論の内容には変化があったものの、主張の本質的な部分には、ほとんど変更がないこともわかった。このような経緯を踏まえて考えたとき、おそらくJamesは、粗大感情に関する主張の内容や批判的意見への対応には自信をかなり持っていた一方で、繊細感情への対応には苦慮していて、もっと説得力の高い議論の進め方ができないかと、長い時間をかけて思慮を巡らしていたのではないかと、筆者は推測する。

これまで、Jamesの感情学説の文献として、Mind誌の論文(James, 1884)、*The Principles* (James, 1890)、およびBriefer course (James, 1892)の3つの文献を取り上げ、これらの文献の間の相違点から、時間経過に伴うJamesの感情学説の内容の変化について、本論および複数の拙論(佐藤, 2022a, 2022b)の中で議論してきた。これまでの検討結果を踏まえると、Jamesの感情学説は、部分的であるにせよ、時間経過に伴って内容に変化が認められるため、一般に、「James-Lange説」と一括りで扱われている感情学説ではあるものの、実際のところ、少なくともJamesの学説については、こうした時間経過に伴う変化を考慮した上で、彼の学説を理解していく必要があるようだ。

今後の課題として、上述の検討結果と合わせ、Jamesの感情学説のもう一つの主要な文献であるPsychological Reviewの論文(James, 1894)についても取り上げて、*The Principles*やBriefer courseにおける感

情学説の内容との間で相違点があるかどうか、もし相違があるとしたら、どのような相違であるのかを詳細に検討することにより、1884年から1894年までの10年間にわたる、Jamesの感情学説の時間経過に伴う変遷を明らかにできるのではないかと考える。

## 注

- 1) *The Principles*の当該部分におけるDarwinの記述については、章の後半(Table 3の6)において引用されている。
- 2) Cannonは、この指摘の中で、Marañonが多くの被験者にアドレナリンを投与した実験の結果について引用している。Cannonの引用によれば、Marañonは、この実験の被験者に実際に認められた主観的体験として、“the subjective experiences included sensations of precordial or epigastric palpitation, of diffuse arterial throbbing, of oppression in the chest and tightness in the throat, of trembling, of chilliness, of dryness of the mouth, of nervousness, malaise and weakness”(cannon, 1927, p. 113; 筆者訳: 心臓周辺ないし上腹部における動悸、広範囲の動脈の脈動、胸の圧迫感と息苦しさ、および喉のつまりと息苦しさ、体の震え、寒気、口渇感、緊張感、不快感、および気持ちの弱さを含む主観的体験)であることを報告している。
- 3) Jamesは*The Principles*において、繊細感情の生成過程について、審美的な感情を例に挙げて、次のように述べている。“the discrimination between the primary feeling of beauty, as a pure incoming sensible quality, and the secondary emotions which are grafted thereupon, is one that must be made.”(James, 1890, p, 470; 筆者訳: 一次的な美の知覚は、刺激として受容された感覚的性質のみを有する一方、二次的な感情は、その後が続いて生じるものであり、これらをきちんと区別しておくことが必要である。)そして、この二次的な感情が生起するメカニズムについて、“These secondary emotions themselves are assuredly for the most part constituted of other incoming sensations aroused by the diffusive wave of reflex effects which the beautiful object sets up.”(James, 1890, p, 470; 筆者訳: これらの二次的な感情を構成している要素の大部分は、他のさまざまな感覚入力的作用であると考える間違いはないだろうし、これらの作用は、美しい

対象物によって生じた、広範囲に拡散する波のような反射の作用によって引き起こされている」と説明している。ここでの議論を見るかぎり、拙論(2022b)でも説明したように、繊細感情の構成要素である二次的な感情(secondary emotions)については、粗大感情と同様に、感覚刺激の入力に伴って生じた反射のメカニズムによって生起するとJamesが考えていたことを意味しており、その点に着目すれば、1884年の論文で提唱された粗大感情が生起する身体のメカニズムに関して、1890年の*The Principles*においては、繊細感情の一部のプロセス、すなわち二次的感情の生起にも同様に関連するものと考えられており、この感情生成のメカニズムの適用範囲が拡大されたとも考えることができるだろう。

## 引用文献

- Cannon, W. B. (1927). The James-Lange theory of emotions: A critical examination and an alternative theory. *The American Journal of Psychology*, 39(1/4), 106-124.
- Dunlap, K. (1922). Editor's preface. In K. Dunlap (Ed.), *The Emotions* (Vol. 1, pp. 5-7). Baltimore: Williams & Wilkins Company.
- James, W. (1884). What is an emotion? *Mind*, 9(34), 188-205. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/2246769>
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology* (Vol. 2). New York: Henry Holt & Co.,.
- James, W. (1892). *Psychology: Briefer Course*. New York: Macmillan and Co.
- James, W. (1894). Discussion: The physical basis of emotion. *Psychological Review*, 1(5), 516-529.
- Lange, C. G. (1922). The emotions: A psychophysiological study. (I. A. Haupt, Trans.). In K. Dunlap (Ed.), *The Emotions* (pp. 33-90). Baltimore: Williams & Wilkins Company. (Original work published 1885)
- 佐藤俊彦 2021a 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(1):「泣くから悲しい」という逆転の発想はどこから来たのか? 長野大学紀要, 43(1), 1-8.
- 佐藤俊彦 2021b 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(2):Jamesの感情学説の原点である1884年の論文について 長野大学紀要, 43(2), 113-123.
- 佐藤俊彦 2022a 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(3):William Jamesは“The Principles of Psychology”においてLangeの学説をどう受け止めたか? 長野大学紀要, 43(3), 173-181.
- 佐藤俊彦 2022b 感情神経科学と感情心理学の先駆としてのJames-Lange説(4):“The Principles of Psychology”におけるJamesの感情学説の変化 長野大学紀要, 44(1), 1-16.